# とりかへばや物語登場人物解説（一）

*鈴木弘道

## 一　系図

○左記の系図は、とりかへばや物語の登場人物について解説を施すため、拙著『とりかへばや物語の研究校注編解題編』『校注とりかへばや物語』の各付録として収めてあるこの物語の系図を再録したものである。

○人物名は、大体、物語における最高官位によって記すことを原則としたが、例外もある。

○（　）の中には、官位の昇進などによる名称やその他の主な別名を記した。

○人物名の右肩には、「二　登場人物解説」所載の人物名と照合しやすいように、番号を施した。

## 二　登場人物解説

○人物名は系図と同じ番号の下に、新かなづかい・漢字・旧かなづかい、の順で示したが、系図と多少異なる場合もある。

○人物名の次の＝＝以下には、簡単な系図的説明を記した。

○根拠を示すための頁数は、前掲拙著のそれであり、巻名とともに（　）内に記したが、大体のところを指す場合が多い。また、岡本保孝の『取替ばや物語考』は、国文学註釈叢書本によった。

○「その他」に集めた人物は、系図作成の不可能なものである。

○なお、前掲拙著所収の「とりかへばや物語登場人物総覧」と重複するところもかなりあることを断わっておく。

**(1)　せんてい　先帝**（せんてい）

〔注〕(10)「吉野の宮」参照。

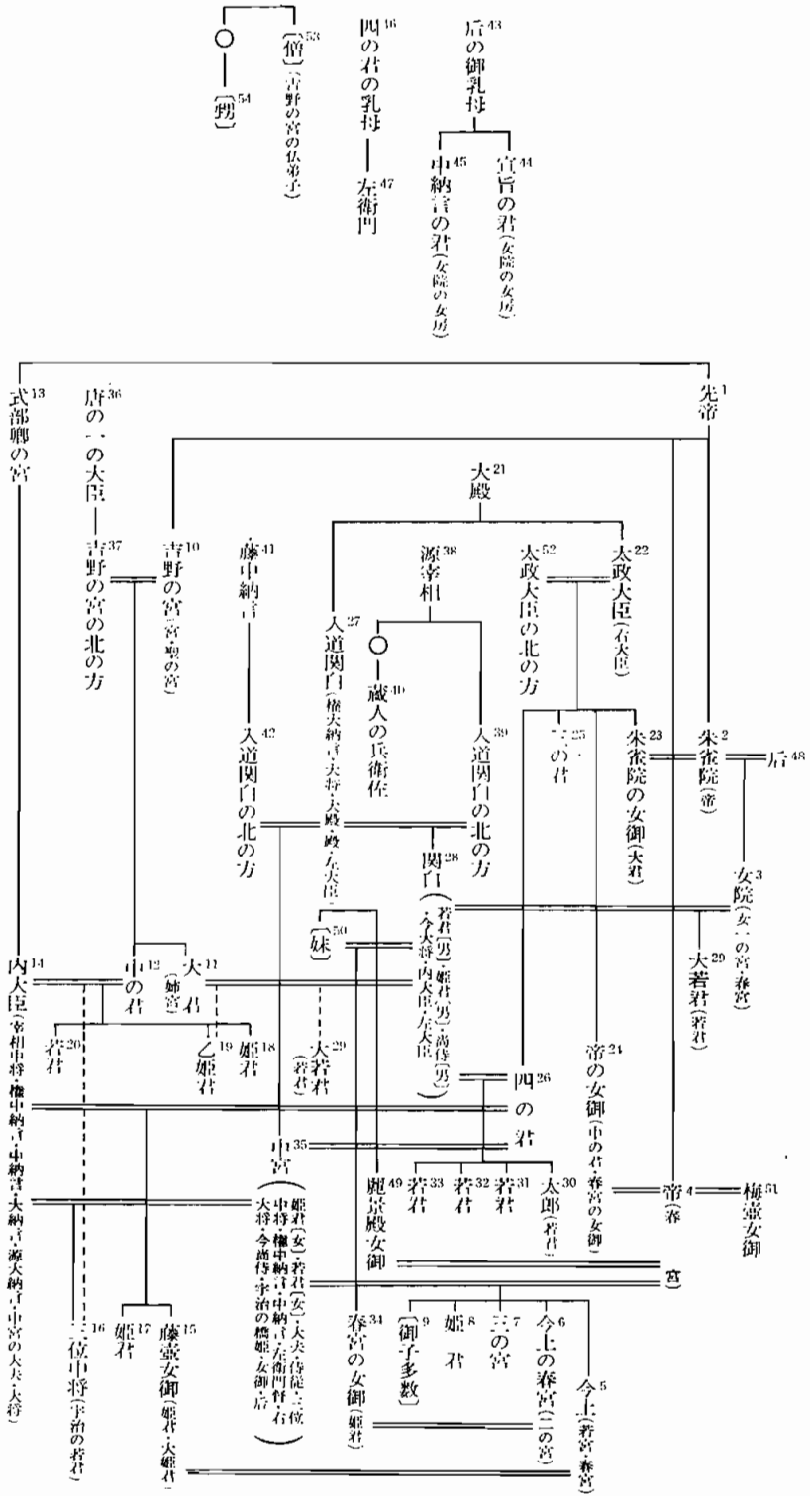
**(2)　すざくいん　朱雀院**（すざくゐん）＝先帝の第一の御子。

〔呼称〕帝

〔注〕「朱雀院」という名は、退位後の御座所をもって呼ぶ。それまではもっぱら「帝」として記されている。

若君(女)の学才・容貌がともにすぐれていることを知り、むりに冠をさえ賜わって、元服・出仕させるように若君(女)の父権大納言に勧める(上一一)。侍従(女)を寵愛すること比類なく(上一三)、この時四十余歳でたいへん立派であった(上一四)。このころ、春宮とともに姫君(男)に御心をかけ、入内の仰言がある(上一四)。姫君(男)と同胞の侍従(女)は女一の宮の後見にしたいと一応考えるが、侍従の昇進を待つことにした(上一五)。そのうち病気にかかり、それが長引くので弟の春

* 国文学研究室（昭和56年9月29日受理）


后43
宣旨の君（女院の女房）44
中納言の君（女院の女房）45
四46の君の乳母
左衛門47
〔僧〕53（吉野の宮の仏弟子）
〔翔〕54
先帝1
式部卿の宮13
唐の一の大臣36
吉野の宮37
吉野の宮（宮・聖の宮）10
大殿21
藤中納言41
源宰相38
太政大臣（右大臣）22
太政大臣の北の方52
入道関白（権大納言・大将・大殿・左大臣）27
入道関白の北の方42
藏人の兵衛佐40
入道関白の北の方39
朱雀院の女御（大君）23
朱雀院（帝）2
后48
女院（女一の宮・春宮）3
大若君（若君）29
関白28（若君（男）・姫君（男）・尚侍（男）・今大将・内大臣・左大臣）
〔妹〕50
内大臣（宰相中将・権中納言・中納言・大納言・源大納言・中宮の大夫・大将）14
中の君12
大君11（姉宮）
若君20
乙姫君19
姫君18
大若君29（若君）
四の君26
帝の女御（中の君・春宮の女御）24
中宮35（姫君（女）・若君（女）・大夫・侍従・三位中将・中将・権中納言・中納言・左衛門督・右大将・今尚侍・宇治の橋姫・女御・后）
若君33
若君32
若君31
太郎30（若君）
鹿苑殿女御49
帝4（春）
梅壺女御51
宮
三位中将（宇治の若君）16
姫君17
藤壺女御15（姫君・大姫君）
春宮の女御（姫君）34
〔御子多数〕9
姫君8
三の宮7
今上の春宮（二の宮）6
今上5（若宮・春宮）

宮に譲位し、女一の宮を春宮にして、自身は朱雀院に引退する（上一七）。春宮女一の宮の後見人として今度は姫君（男）を適当と思い、姫君（男）の父左大臣に交渉する（上二五）。

**（3）にょういん　女院（にょうゐん）**＝朱雀院の御女。御母は后。

〔呼称〕女一の宮・春宮

亡母后の腹に誕生する。帝の一人子というので特に目をかけられて養育される（上一四）。やがて女ながら立坊（上一七）、女春宮として梨壺に住む（上二六）が、宣耀殿の尚侍（男）と密通して（上二六）懐妊する（中一三三）。その後、今尚侍（女）と対面するが、今尚侍（女）を前の尚侍（男）と思いながらも少し様子の違うことを感じる（下一九〇）。そこで今大将（前の尚侍（男））に忍んで対面し、真相を聞く（下一九〇）とともに、今大将（男）と歌を贈答する（下一九二）。その年の十二月若君（今大将（男））との間の子。大若君）を出産（下一九九）。帝の位にもつかず、翌年一月、若君の五十日のころに女院と申すことになる（下二四七）。

**（4）みかど　帝（みかど）**＝先帝の第二の御子。

〔呼称〕春宮

〔注〕この帝が、はたして朱雀院の御弟であり、また、先帝の第二の御子であるかどうかについては確証はないが、物語の内容によって、朱雀院・帝・吉野の宮は兄弟の間柄ではないかと思われるので、この推定のもとに、一応、「系図」を作成した。『全訳王朝文学叢書』の訳本所収「系図」にも、同様の記載が見られるが、岡本保孝の「取替ばや物語考系譜」には、三方の兄弟関係につき明示されていない。

若君（女）の学才・容貌がともにすぐれていることを知り、たびたび出仕の仰言を下す（上一一）。二十七・八歳になって、容貌なども王らしい気品が備わるが、このころ兄帝（後の「朱雀院」）とともに姫君（男）に御心をかけ、入内の仰言がある（上一四）。そのうち兄帝の病気が長引くので即位して帝と称す（上一七）。十一月、五節に中院の行幸がある（上二七）。やがて中納言（女）を召し、尚侍（男）を女御として奉るよう仰言がある（上八七）。その後、南殿の観桜の御遊が催され、勅題が出されたが、中納言（女）の作ったのは稀代の絶唱であったので御衣を脱いで中納言（女）に与えた（上一〇三）。今大将（男）を召し、歌を贈答する（中一七五）が、今大将（男）が前の尚侍（男）であることを知らず、やたらに前の尚侍（男）に対する昔の恋しさが忘れられず、梨壺へ行く（下一九三）。かくて今尚侍（女）と密通し（下二〇七）、今大将（男）を通じて今尚侍（女）に消息したりする（下二一一）。年月も移り過ぎて、譲位する（下二五九）。

**（5）きんじょう　今上（きんじょう）**＝帝の第一の御子。御母は中宮（女）。

〔呼称〕若宮・春宮

今尚侍（女）二十一歳の冬、十一月か十二月に誕生（下二四四）。翌春一月、五十日のころに立坊（下二四七）。中宮（女）三十歳以上のころに即位する（下二五九）。

**（6）きんじょうのとうぐう　今上の春宮（きんじょうのとうぐう）**＝帝の第二の御子。御母は中宮（女）。

〔呼称〕二の宮

中宮（女）二十三歳より二十九歳までの間に誕生（下二五〇）。大納言の宇治の若君とともに、中宮（女）のもとで遊ぶ（下二五二）。その後、立坊（下二五九）。

**（7）さんのみや　三の宮（さんのみや）**＝帝の第三の御子。御母は中宮（女）。

中宮（女）二十三歳より二十九歳までの間に誕生（下二五〇）。

**（8）ひめみや　姫宮（ひめみや）**＝帝の第一の御女。御母は中宮（女）。

中宮（女）二十三歳より二十九歳までの間に誕生（下二五〇）。

**(9)** **〔みこたすう〕御子多数**＝帝の御子。御母は中宮(女)。中宮(女)二十三歳より二十九歳までの間に誕生(下二五〇)。

**(10)** **よしののみや　吉野の宮**(よしののみや)＝先帝の第三の御子。

〔呼称〕宮・聖の宮

〔注〕(4)「帝」参照。

渡唐して唐の一の大臣の娘と結婚し、女児二人を儲ける。しかし、妻が死亡して悲嘆のあまり出家をとげようとまで考えたが、二人の女児があるためにそれもできず、ただ心だけ出家した気持を抱く。やがて妻の父も娘を亡くした悲嘆のため病死したが、再婚問題に絡んで殺害されそうになったので女児を連れて日本に帰国し、都で人目を忍んで暮らすことになる。そのうちに、どうしたわけか即位企図の噂が流れたので俄に出家剃髪し、吉野山の麓に景色のよい御領地があった所に女児とともに隠れ住む(上四九)。万事にすぐれ、学才・陰陽・天文・夢解き・相人などの知識を持つ人である(上四九)。中納言(女)の訪問を快く迎え、そのすぐれていることに感心する(上五九)が、その後も大将(女、もと中納言)の来訪を待ち受けて大将(女)を慰め(上一一〇)、真心をこめて護身の祈禱などし、薬もさし上げられる(上一一〇)。翌年三月十余日、二条殿に引取られて行く大君・中君と別れを惜しんで歌を贈答し(下二一六)、後、いちずに仏道に精進する(下二一七)。

**(11)** **かんぱくのきたのかた　関白の北の方**(くわんぱくのきたのかた)＝吉野の宮の第一の女。母は吉野の宮の北の方。

〔呼称〕姉宮・大君

吉野を訪れた中納言(女)と歌を贈答する(上六二・中一一一)。後、行方不明の大将(女、もと中納言)を探しに吉野に来た尚侍(男)と密通したり(中一六五)、歌を贈答したりする(中一七一)。翌年三月十余日、今大将(男、もと尚侍)に伴なわれ、吉野より二条殿に引取られて今大将(男)の正妻となる(下二一五)。父宮と別れに際し歌を贈答する(下二一五)。実子がないので、内大臣(もと今大将)の、春宮(女一の宮)腹の若君(大若君)や、大納言の乙姫君(妹中の君との間の子)を引取って養育する(下二五一)。

**(12)** **ないだいじんのきたのかた　内大臣の北の方**(ないだいじんのきたのかた)＝吉野の宮の第二の女。母は吉野の宮の北の方。

〔呼称〕中の君

三月十余日、今大将(男、もと尚侍)に伴なわれ、姉大君とともに吉野より二条殿に引取られる(下二一五)。父宮と別れに際し歌を贈答する(下二一五)。翌年の六月十余日、今大将の手引で中納言に逢い、縁組(下二四〇)。その年の冬、宇治の若君を預かって養育する(下二四五)うちに姫君二人・若君一人(いずれも大納言(もと中納言)との間の子)を出産し、乙姫君は、姉吉野の宮の大君の養女とする(下二五一)。

**(13)** **しきぶきょうのみや　式部卿の宮**(しきぶきょうのみや)＝帝の叔父。

〔注〕(14)「内大臣」参照。

中納言が宇治の若君を連れて帰京する条に、「若君具して、京の宮にまづ出でたまひて」(中一八二)とある。

**(14)** **ないだいじん　内大臣**(ないだいじん)＝式部卿の宮の子。

〔呼称〕式部卿の宮の中将・宰相中将・権中納言・中納言・大納言・源大納言・中宮の大夫・大将

侍従(女)より二歳ぐらい年長で、侍従(女)には及ばないが、一般人より美しく上品で好色なので(上一六)、大将(権大納言)の姫君(男)と四の君の二人ともに懸想し(上一六)、侍従(女)に姫君(男)のことを語る(上一六)。そのうちに、今まで中将であったが宰相を兼任する(上一九)。九月十五日、月明の夜、内裏宿直の中納言(女、もとの侍従)を探しあて、

姫君(男)のことについて取持ってくれない恨みを言って口説く(上二二)と同時に、中納言(女)の美しさに魅力を感じ、女として見たいと恋しく思う(上二四)。あたかも中納言(女)の横笛と尚侍(男)の琴を立ち聞き、中納言(女)のもとへ行く(上三二)。中納言(女)が宮中の宿直のため不在中、四の君と密通し(上三五)、四の君は懐妊の兆候が現われるようになった(上三六)。四の君の女房左衛門のもとにたびたび四の君宛の手紙を届ける(上三七)。中納言(女)に対面して、最近身体不調なることを話すが、事情を察した中納言(女)から恋の病だと嫌味を言われて帰ってしまう(上四〇)。しかし、その後も左衛門の手引で、しばしば四の君のもとに通い(上四一)、四の君の出産後、産養のある日も四の君のもとに忍び入るが、扇や畳紙などを落としておいたために、四の君の密通相手であることを中納言(女)に知られる(上七三)。一方、尚侍(男)が物忌の時、宰相の君に手引させて尚侍(男)のもとに忍びいるが、すかされて帰り(上七六)、贈答の歌がある。その後は、尚侍(男)から手紙も来ず、四の君にも逢えず、恋情を中納言(女)に移し(上七九)、中納言(女)のいる西の対に行って中納言(女)と密通するが、この時、初めて中納言(女)の男性でないことを看破する(上八二)。たびたび中納言(女)と贈答歌があり(上八四)、四の君との逢瀬の機会を、中納言(女)に作ってもらったりする(上八九)ほか、中納言(女)が月の障りのため、六条近辺の乳母の家にいる時、中納言(女)を訪問(上九一)、一夜共寝して、中納言(女)に、女の姿に還るよう勧告する(上九二)。かくて権中納言に昇進(上一〇四)、同時に右大将に昇進した中納言(女)に祝いの手紙を出す。四の君からも官位昇進祝いの手紙を受取るが、その手紙を発見した大将(女、もと中納言)から嫌味を言われる(上一〇六)。しかし、懐妊中の大将(女)を隠まうため、大将(女)と宇治へ籠る日を約し(中一〇九)、いよいよ大将(女)を伴なって宇治へ行くことになる(中一一七)。宇治到着の翌朝、大将(女)を女の形に変わらせる(中一一八)。一方、左衛門からの手紙で四の君の病状が悪いことを知って、京都の四の君のもとに行き(中一二四)、四の君の看病のため、五・六日間そこに滞在する(中一二五)が、再び宇治へ行き、大将(女)を懐妊中も出産時も看病する(中一二七・中一四三)。その後、四の君のもとへ行き、その懐妊について何かと世話をするが、七・八日間、大将(女)には何のたよりもしないで、久しぶりに宇治へ来て大将(女)に四の君の噂をする(中一四七)。その日の夕方、四の君の出産が近いことを京都からの使に聞いて、急遽、京都に帰り(中一四八)、いったん宇治に来るが、再び京都からの使が四の君の容態の険悪なことを宇治に告げに来たので京都に帰るが、その翌朝四の君が安産したので、四の君のもとからその旨を大将(女)に報告する(中一六〇)。やがて大将(女)は宇治から吉野に脱走するが、そのことを知らずに四の君のもとから宇治に来て、大将(女)の姿の見えないことを嘆き悲しむ(中一六六)。仕方なく宇治の若君を連れて帰京し、参内するが、今大将(男、もと尚侍)を見ても、今尚侍(女、もと大将)と取り交わっていることに気がつかず、もとの大将(女)の行方を案じている(中一八二)。四の君からも見捨てられたので、左衛門に会い、四の君を恋い慕っていることを話す(下二二二)。結局、今大将(男)の二条殿で吉野の姫君たちをかいまみ、六月十余日、吉野の宮の中の君と縁組(下二四〇)。同年冬、大納言に昇進し(下二四五)、翌年四月、中宮の大夫を兼任(下二四七)、やがて内大臣で大将を兼任する(下二五八)。

**(15)　ふじつぼのにょうご　藤壺女御**（ふぢつぼのにようご）＝内大臣の第一の女。母は関白の北の方。

〔呼称〕姫君・大姫君

中納言(女)十七歳または十八歳の時に誕生する(上七一)。やがて人形

のように物につかまって立上りなどし(中一一二)、大将(女、もと中納言)のあとを慕ったりする(中一一四)。成人して今上の女御となり、藤壺にいる(下二五九)。

〔注〕二五九頁に、「今の関白殿の四の君腹の大姫君、女御にまゐりたまひて、藤壺にさぶらひたまふ。」と見える。ただし、今の関白(もと今大将、男)には、その実際の子として、四の君腹の姫君というのは一人もなく、二五八頁にも、「四の君腹の姫君たちはなちては、女もものしたまはねば」とあるが、四の君はすでに今の関白の北の方として二条殿にいるはずであるから、実は内大臣(もと中納言)と四の君との間の子も、ともに今の関白殿のもとで養育されていたと見るべきである。なお、二五九頁の本文中の「大姫君」とは、姫君中でも年長者を指して言ったものと考えられる。岡本保孝の『取替ばや物語考系譜』三三頁(国文学註釈叢書本)にも、この「藤壺女御」に相当する「女」と、17「姫君」に相当する「女」との両人を、28「関白」に相当する「男君」の子として系図を作成し、さらに、「コノ両人ハ、ミナ、式部卿ノ御子ノ、四君ニウマセタルナリ。」と施注している。

**(16)　さんみのちゅうじょう　三位中将**(さんみのちゅうじゃう)＝内大臣の第二子。母は中宮(女)。

〔呼称〕宇治の若君

大将(女)十九歳の七月一日、宇治で誕生する(中一四四)。同年冬、中納言に連れられて帰京(中一八二)後、吉野の宮の中の君に預けられ養育される(下二四五)。中宮(女、もとの大将)二十九歳の春、十一歳の時、中宮(女)のもとでいろいろ語り、中宮を母君かと思う(中二五二)。その後、三位中将に昇進する(下二五九)。

**(17)　ひめぎみ　姫君**(ひめぎみ)＝内大臣の第二の女。母は関白の北の方。

〔注〕(15)「藤壺女御」参照。

大将(女)十九歳の秋、誕生(中一六〇・一六九)。

**(18)　ひめぎみ　姫君**(ひめぎみ)＝内大臣の第三の女。母は内大臣の北の方。

中宮(女)二十三歳より二十九歳までの間に誕生(下二五一)。

**(19)　おとひめぎみ　乙姫君**(をとひめぎみ)＝内大臣の第四の女。母は内大臣の北の方。

中宮(女)二十三歳より二十九歳までの間に誕生し、やがて吉野の宮の大君(関白の北の方)に養育される(下二五一)。

**(20)　わかぎみ　若君**(わかぎみ)＝内大臣の第六子。母は内大臣の北の方。

中宮(女)二十三歳より二十九歳までの間に誕生(下二五一)。

**(21)　おおいどの　大殿**(おほいどの)＝姫君(男)・若君(女)の祖父。

〔注〕上巻、姫君(男)裳着の条に、「大殿ぞ御腰は結ひたまふ。」(一二頁)とあり、川端康成氏は、この「大殿」を「父の大将」とされ(『現代語訳国文学全集』第三巻所収「とりかへばや物語」二四四頁)、『全訳王朝文学叢書』の訳本には「姫君の祖父君」(一一頁)とあるが、「大殿も、今は御年七十におよび、御やまひもおもくのみおぼさるれば、御ぐしおろしたまひて」(一七頁)の「大殿」と同一人物であると見なしておく。なお、拙著『平安末期物語についての研究』所収「第三篇とりかへばや物語　第八章『大殿』『宰相の君』考」参照。姫君(男)の裳着の際、裳を結う(上一二)が、七十歳になって重病のため剃髪(上一七)。

**(22)　だじょうだいじん　太政大臣**(だじやうだいじん)＝大殿の第一子。

〔呼称〕右大臣

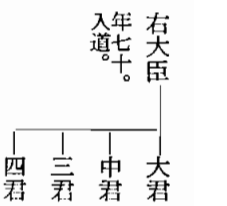
若君(女)の元服の際、冠を着せる(上一三)。娘の四の君と若君(女)と結婚させたいと思い(上一三)、若君(女)が女性であることを知らずに、その縁談を積極的に進めて結婚させる(上一九)。四の君が中納言との密通により懐妊三・四か月になったことを知り、正式の夫婦関係による懐妊と信じて大いに喜ぶ(上四二)。密通事件その他で厭世心を起して一時吉野に姿を隠した中納言（女、もと若君）が十余日後に帰ったのを見て喜んだ(上六八)が、その原因を知って情なく思う(中一二二)とともに四の君を勘当する(中一二三)。その後、四の君の勘当を許し（中一七三）ついには太政大臣に昇進する(下二五八)。

**(23)　すざくいんのにょうご　朱雀院の女御**（すざくゐんのにようご）＝太政大臣の第一の女。御母は太政大臣の北の方。

〔呼称〕大君

春、若君(女)元服、姫君(男)裳着の条に、「この大臣は、姫君のかぎりぞ四人持ちたまへる。大君は内の女御、中の君は春宮の女御、三四の君はたゞにておはするを」(上一三)とあり、一五頁に、「右大臣殿の女御、やんごとなくてさぶらひたまひぬれど、一の人の御むすめならねば、后にもえゐたまはず。」四四頁に、「いでや、そこには、大将、女御の御方々をこそ思ひきこえたまへれ、この御方にはおろかなるなめり。かくしるくなるまで知らぬ人やある。」などと見える。

〔注〕従来、この「朱雀院の女御」と(51)「梅壷女御」とは、同一人物であるとする説と、別人であるとする説などがあるので検討しておく。前者と見るのは、拙著『浚明本とりかへばや』の傍注、校註国文叢書本・校註日本文学大系本・『全訳王朝文学叢書』の訳本の頭注、川端康成氏の「とりかへばや物語」(『現代語訳国文学全集』第三巻所収）の注などであるが、岡本保孝の『取替ばや物語考系譜』には、




（三三頁）

とあり、別に、

梅壷女御

仙洞ノ女御ナルベシ。殿ノ姫君、男ノマネシテ居給ヒシ比、コノ女御ノ御イキホイヲウラヤミ給ヒシコトアリ。（三六頁）

と見える。右の説明文中の「仙洞」とは(4)「帝」のことであるが、保孝の右の記述の仕方によると、「大君」と「梅壷女御」とは全く別人の関係にあることになる。このほか、小木喬博士は、「古とりかへばや物語の復原」(『平安文学研究』第四十七輯）の中で(24)「帝の女御」すなわち「太政大臣の第二の女」を「梅壷女御」とすべきことを述べておられる。ところで、この「梅壷女御」は、中納言(女)十六歳秋九月十五日の条に登場するだけで、それ以外の箇所には全く名前さえ現われない。しかし、右の条には、たまたま「梅壷女御」が帝の御寝所に参上なさる場面が描かれ、女御は「いみじくもてなしかしづかれたまふさま」(二二頁)であり、しかも、その姿を見た中納言(女)が、自分が本来の女姿であったら、このような様子に待遇されるであろうと羨ましく思ったというから、この「梅壷女御」は、帝にはことのほかに御寵愛を蒙った女御であると考えられる。一方、後に、中納言(女)が中宮(女)になって帝の御寵愛を一身にあつめられたため、「右の大臣の女御は、人よりさきにまゐりたまひて、われはとおぼしたりつるに」(二五〇頁）肩身狭く思われて里へ退出してしまわれたことが記されているが、この「右の大臣の女

御」は、(24)「帝の女御」で、しかも、帝の女御の中で最古参格の女御(右大臣の中の君。もと春宮の女御)であることがわかる。したがって、前記「梅壺女御」という女御とは同一の人物である可能性がきわめて濃厚であるが、より強度の確証がないかぎり、ここでは、一応、別人と見ておくことにする。ちなみに、最古参格の女御である「右の大臣の女御」については、拙著「渡前本とりかへばや」の傍注に、

右大臣の大姫君ときこえしはこの物語の前にまいり給ふと見えたり(三三六頁)

とあるが、前述のごとく「右大臣の大姫君」は「朱雀院の女御」であるから、「右の大臣の女御御退出」とは何等の関係もないはずで、傍注の失考と考えざるを得ない。

**(24)　みかどのにょうご　帝の女御**(みかどのにようご)＝太政大臣の第二の女。御母は太政大臣の北の方。

〔呼称〕中の君・春宮の女御

〔注〕(23)「朱雀院の女御」参照。

中宮(女)に対する帝の御寵愛が深くなるため、肩身狭く思われて里へ退出する(下二五〇)。

**(25)　さんのきみ　三の君**(さんのきみ)＝太政大臣の第三の女。御母は太政大臣の北の方。

〔呼称〕大将の上？

〔注〕(23)「朱雀院の女御」・○「大将」参照。四四頁に「いでや、そこ(右大臣ノ北ノ方)には、大将、女御の御方々をこそ思ひきこえたまへれ、この御方(四ノ君)にはおろかなるなめり。」とあり、この「大将」は「大将の北の方」の意で、「大君」の誤写とも考えられるが、桑原博史氏は、三の君であろうと説いておられる(『とりかへばや物語(一)』一五六頁)。また、七三頁に「ひとつによろこびて、殿上御湯殿、大将殿の上迎へ湯など、もてさわがるゝに、」とあるが、この「大将殿の上」も「三の君」であろうか。四の君の安産(宰相中将との間の子)を喜び、迎え湯の役をするのである。

**(26)　かんぱくのきたのかた　関白の北の方**(くわんぱくのきたのかた)＝太政大臣の第四の女。御母は太政大臣の北の方。

〔呼称〕四の君(初め、三位中将(女、後、中宮)ノ北ノ方。後、内大臣ノ北ノ方)

〔注〕(23)「朱雀院の女御」参照。

物語の初めでは独身であったが、三位中将(女)が男性であるとばかり信じて、十九歳になるまでに結婚する(上一九)。中納言(女、もと三位中将)が十七歳の春、中納言(女)が宮中の宿直のため邸に不在であった時、忍び込んで来た宰相中将に犯され(上三五)、その事件後、悪阻に悩む(上三六)。しかし、四の君の乳母子の女房左衛門の手引で宰相中将はしばしば通って来るので、しだいに宰相中将を恋しく思うようになる(上四一)。懐妊三・四か月になり、実情を知らない父右大臣を大いに喜ばせ(上四二)、やがて姫君(宰相中将との間の子)を出産する(上七一)。その後、七日目に大将殿の産養がある日、宰相中将が左衛門の手引で忍び入り(上七三)、再び宰相中将の胤を宿す(上九五)。宰相中将は中納言に昇進したが、四の君はその官位昇進祝いの手紙を出す一方、吉野へ逃避して帰京した夫の大将(女、もと中納言)と贈答の歌を詠んだりする(中一一三)。しかし、大将の逃避が中納言との密通事件に一因があることを知った父右大臣に勘当された(中一二三)まま再び姫君を出産する(中一六〇)が、やがて許されて父右大臣に引取られるようになる(中一七〇)。その後、今大将(男)に逢って契を結び(中一八〇)、十二月ごろ懐妊(下二一八)、翌年八月晦日、出産のため、二条殿へ参

上し（下二四三）、九月一日ごろ若君（今大将（男）との間の子）を出産するほか、数年後、三人の若君（いずれも今大将（男）との間の子）を出産する（下二五一）。

**(27)　にゅうどうかんぱく　入道関白**（にふだうくわんぱく）＝大殿の第二子。

〔呼称〕権大納言・大将・大殿・殿・左大臣

〔注〕(28)「関白」と区別するため、便宜上「入道関白」とする。

いつのころか、権大納言で大将を兼任しており、容貌・学才・性質・人柄・世評、などすべて並々でなく、何一つ不満な点はなかったが、子供のことだけがただ一つ悩みの種であった（上五）。というのは、男君に次いで女君が誕生したが、二人の性格・態度がそれぞれ女性的・男性的であったからで、二人を「とりかへばや」と言って嘆き、結局、若君を姫君（男）、姫君を若君（女）と呼ぶようになる（上七）。二人の子供の母北の方は別々の人であったので、一か月のうち十五日ずつそれぞれの北の方のもとに通うようにしていた（上八）。姫君（男）が十二歳の春、物忌のためつれづれなる時、姫君（男）のいる東の対へ渡る（上八）が、その女性的行状を見て悲嘆にくれ（上九）、ついで若君（女）のいる西の対へ渡るが、その男性的行状を見て同じく悲嘆する（上一〇）。しかし若君（女）のすぐれていることに思い慰む（上一三）。やがて帝の譲位に伴い、左大臣関白となる（上一七）。このころ、右大臣の希望で、三位中将（女、もと若君）が女性であることを知りつつも、中将と右大臣の四の君との結婚を許す（上一九）。帝からは、姫君（男）を春宮（女一の宮）の後見人として勧められたが、姫君（男）が男性であるため、心を乱す（上二五）。翌年一月上旬、宣耀殿の尚侍（男、もと姫君）のもとに行き、一緒にやって来た中納言（女、もと三位中将）の二人に対して、兄妹が仲よくすべきことなどを諭す（上三〇）。そのうちに四の君の懐妊を右大臣より聞いて、夫の中納言（女）が真の男性でないことを知っているので、大いにあきれ驚く（上四七）。四の君の密通事件などのため、吉野へ一時的に姿を隠した中納言（女）が十余日ぶりに帰京したのを見て喜ぶ（上六八）。その後、宰相中将に犯された中納言（女）の、気分がすぐれないことを聞き、御修法・祭・祓など、本復のために手を尽くすべきことを指図する（上一〇一）が、大将（女、もと中納言）が失踪するや、またもや祈禱を続け（中一一九）心を痛める（中一二八）。失踪した大将（男）を探し当てた尚侍（女）が宇治から帰京したのに逢って喜びに堪えず、将来のことを話し合って（中一五六）後、剃髪、仏道に入る（下二五八）。

# On the Characters in the Tale of Torikaebaya (1)

Hiromichi SUZUKI

**Summary**

This study expounds the characters in the Tale of Torikaebaya (To be continued,)